

一九九七年度国文学会彙報

一九九七年度国文学会活動状況

△新入生歓迎会△ 四月四日 新島会館 学生部会主催

△国文学会総会、研究発表会△ 六月二三日 至誠館会議室

・総会

・研究発表会

「川端康成『伊豆の踊り子』に関する一考察―主体という物

語の生成 植山みどり(大学院博士課程前期課程)

私の工夫―語呂合わせを利用した古典文法導入法

石和田秀幸(千葉県立木更津東高校教諭)

〈命〉の表現をめぐる―『今昔物語集』とその周辺

藤井俊博(本学助教)

△院生部会主催講演会△ 一月二二日 明德館21教室

現代文学理論について―谷崎潤一郎『痴人の愛』冒頭部を取り上

げてテキスト論を視座として 小森陽一(東京大学教養部助教)

△学生部会主催講演会△ 一月一四日 弘風館22教室

失われた意味の再構成―宮廷語の場合

堀井令以知(関西外国語大学教授)

△同志社国文学△

第四七号 一九九八年一月三〇日発行

第四八号 一九九八年三月二〇日発行

△国文学会会報△ 第二五号 一九九八年三月二〇日発行

一九九七年度修士論文題目

延慶本『平家物語』の構想

―「天」を中心として―

石丸 文子

『義経記』赤木文庫本の常盤譚をめぐる

谷村 知子

「三鳥歌舞伎」考

木谷 真紀子

―「地獄変」「鰯壳恋曳網」「中村歌右

衛門論」を視座として―

賀茂真淵論 学問とその周辺

西尾 勝彦

「一夜論」漱石の芸術的観念をもとに

田中 利佳

谷崎潤一郎「愛すればこそ」論

馬場 夕美子

―大正期の一転機として―

太宰治文学における〈喜劇〉

米田 幸代

―「黄村先生」シリーズを手掛かりとして―

『受給動詞の体系』について

米澤 昌子

モダリティを表す時間副詞の意味・用法

塩見 式子

―「早速」を例として―

外来語の機能負担量

橋本和佳

一九九七年度卒業論文題目

「高照日之皇子」の表現の形成

水谷友香

——人麻呂「日並皇子殯宮挽歌」を中心に——

「平家物語」「猫間」の段の義仲

上林英公子

志貫皇子

秀島健太郎

——史書と歌からの人物像——

「建礼門院右京大夫集」について

堀貴美子

大伴坂上郎女の「怨恨歌」

大石奈穂

『万葉集』の和歌における「時雨」と季節

柳生高志

家持における景物としての「月」

後藤理香子

——越中時代を中心として——

休滑稽咄について

佐々岡千幸

仏教説話としての『日本霊異記』

吉武哲雄

——行基との関係をめぐって——

『おようのあま』について

澤田真紀子

『江談抄』「郭公為鶯子事」の注釈の方法

中村第介

——鳥の鳴き声の表現をめぐって——

『平家公達草紙』

小林加代子

『宇治拾遺物語』「鬼に喰取らるる事」考

大野綾子

西行の四国への旅

粕谷修司

『平家物語』における祇王説話について

赤澤信明

——『覚一本』を中心に諸本の比較を通して——

宇治加賀掾正本「源氏供養」における考察

谷畑恵美

覚一本平家物語における忠度像

松岡利幸

——「忠度都落」の段をめぐって——

近松浄瑠璃における歌舞伎撰取の方法

鈴木亜矢子

『平家物語』覚一本における平重盛像

村上哲也

鬼界島流人説話の伝承

桜井裕美子

——康頼と有王と——

「隆信歌群」をめぐって

堀貴美子

「諏訪の本地」の地底遍歴について

加糖真弓

「太平記」における足利尊氏像

山本祥之

「一休咄」

佐々岡千幸

——休滑稽咄について——

『おようのあま』について

佐々岡千幸

——絵巻から絵本へ——

——主にその成立について——

澤田真紀子

韓・日の七夕の詩歌

金美蓮

五説経における巫女的な女性像

金子真美子

——説経「しんとく丸」諸本の比較を中心にして——

金子真美子

宇治加賀掾正本「源氏供養」における考察

谷畑恵美

——説話的背景に見る源氏物語の近世的受容——

谷畑恵美

近松浄瑠璃における歌舞伎撰取の方法

鈴木亜矢子

——女武道を中心に——

鈴木亜矢子

『曾根崎心中』 「観音廻り」の役割について

松山 光子

『曾根崎心中』 「観音めぐり」の意義

中森 健文

『曾根崎心中』 「観音廻り」の存在意義

高杉 征司

『心中天の網島』における「義理」について

門野 真田美

『女殺油地獄』 研究史

柴田 栄美

『世間胸算用』の評価の問題

小田 恭子

『日本永代蔵』の方法と視点

萩 彩子

——三都の描写をとおして——

『懐硯』の性格

江口 聖子

『雨月物語』の怪異

小跡 敦

『雨月物語』 「夢心の鯉魚」の分析

定久 知恵子

夢心の鯉魚の評価について

伊藤 由美子

『浅茅が宿』と『宮木が塚』をめぐって

寺内 伸介

——体験の創作への影響——

『仮名手本忠臣蔵』と黄表紙

伊藤 和代

『仮名手本忠臣蔵』の考察

橋本 香根子

——三段目、九段目を中心に——

歌舞伎十八番『勸進帳』の魅力

長谷川 親子

川柳からみた歌舞伎——江戸庶民の視点を通して

二島 令子

『南方録』についての一考察——著者をめぐって——

洒落本『通言総籙』

吉岡 佐知子

——喜之介女房おちせの「通」試論——

俄における歌舞伎の受容

山本 佳葉

——『古今俄選』に見られる俄の歌舞伎利用の形態と方法——

話芸としての落語

松村 早織

——落ちの考察を通して——

『南方録』についての一考察

畑 幸恵

——著者をめぐって——

『父の終焉日記』の説き明かされない謎

今西 章子

昔話「狐女房考」

原 秀児

——「唱え語」を中心に——

昔話「カチカチ山」の表現と構成

武藤 容子

笑話としての「鼻の養生（鼻高扇）」

中澤 ちづる

——イロリをめぐって——

夏目漱石「趣味の遺伝」論

藤原 智孝

漱石・与次郎、競馬場への道程

廣田 慎子

芥川龍之介

神垣 伸

——「もう一人の自分」をめぐって——

彼は何故、彼自身を「彼」と呼んだのか

刈谷 哲

『風の又三郎』の制作意図について

行村 まどか

梶井基次郎「檸檬」論

山口 七絵

「光」としての現実と「闇」としての退廃のはざままで

池永 洋介

志賀直哉「山科」ものについて

山田 陽子

「瑣事」をめぐる

山田 陽子

昭和エロ・グロ・ナンセンス期における『芋虫』

吉川 絵美

〈おもて〉の作家・内田百閒

信藤 玲子

『冥途』を中心に

信藤 玲子

『山海評判記』 ヒロインをつなぐ信仰について

井上 晶子

夢野久作『ドグラ・マグラ』

井上 晶子

「私」という「装置」

松井 まり代

岡本かの子「鮎」「家霊」

松井 まり代

母と食物の関わり

上山 尚子

『断崖の錯覚』論

上山 尚子

『細雪』 雪子と妙子について

深谷 由布

言葉・主体・自意識

森川 和美

小林秀雄の方法論に関する研究

田邊 博史

吉川英治『宮本武蔵』に見る国民文学性

田邊 博史

日本人の思想の余白

杉山 由紀子

「夜長姫と耳男」論

大木 智洋

女という制度 林芙美子「晚菊」

松島 由貴子

「船」を眺める者たちの物語

細田 真由美

——三島作品における「船」をめぐる

細田 真由美

『S・カルマ氏の犯罪』

廣枝 聖一

——安部公房における方法の発見

廣枝 聖一

三浦綾子「積木の箱」論

千葉 真澄

——背景地「北海道」を中心に

塚本 彩子

司馬遼太郎と「技術」

早水 裕子

やさしさの時代の中で

早水 裕子

——『ねじまき鳥クロニクル』

下部 佳子

来るべき新世紀に向けて

下部 佳子

——リアルな今を切り取る桜井亜美の作品

横幕 美穂

異体字の考察

塩江 敦子

——『南総里見八犬伝』に見られる異体字を中心に

塩江 敦子

明治初期小新聞における振り仮名の機能

安川 千代

——明治十年頃の三紙の調査

安川 千代

次元形容詞の日英語比較

古川 智子

山形市とその周辺居住者における方言意識に
対する調査とその考察

長谷川 吉次郎

漫画「美味しんぼ」に見る現代日本語の味覚

表現の拡張と限界

木村 匡志

外国映画の邦語訳の際に生じる、映画の意味

内容が題名の機能に与える規則性について

岸 田 剛

歌謡曲にみられる色彩語彙

中 島 由紀子

法律条文中の用言の指示内容の不統一性についての研究

大 木 敦 吏

週刊誌の見出しの語彙論的研究

城 山 早 苗